

雑感

1969年（昭和44年）に入所したときには、平城宮跡の発掘は内裏正殿の南に広がるプレハブ建物群を調査事務所としていました。蚕棚のような木製の二段ベッドでの宿直もあり、鉄製の釜である五右衛門風呂に入った。翌年には今の資料館建物が新築され調査部はそこへ移転しました。このような平城宮調査の草創期の名残を知るのには、われわれの年代が最後ということになるのだろう。



西村 康さん

このころ、月に一回所員会議があり、春日野の本庁舎へ出かけていました。発掘調査関連の本以外はこの春日野にあり、皆はこの機会に図書をみることも心がけていたようです。自分にとっては、市内へ出かけるのは、まだ奈良を知らない状態であったので珍しく、楽しみでもありました。会議の後で、先輩たちにつれられて博物館の前にあった食堂で昼食をとるのが恒例で、奈良らしい田舎料理を味わえました。

そんな状態の新人生活の中で、印象に残るのは、先輩や事務職員の皆さんが、われわれを一人前の研究者として、分け隔て無く接してくれたことです。むしろ、われわれの方は、先輩と後輩という違いは常に意識していましたが、このような自由な雰囲気は小さな驚きでありました。学生時代に外から見ていた印象とはずいぶんと違ったところです。

そんな状態の新人生活の中で、印象に残るのは、先輩や事務職員の皆さんが、われわれを一人前の研究者として、分け隔て無く接してくれたことです。むしろ、われわれの方は、先輩と後輩という違いは常に意識していましたが、このような自由な雰囲気は小さな驚きでありました。学生時代に外から見ていた印象とはずいぶんと違ったところです。

このように、先輩でも若輩でも研究者としては同じであるという意識が、研究所全体にあります、ということが奈文研の活力を生み出す源となっているのではないかと思います。

これからも、この伝統が継承されていくことを願うものであり、これがある限り、奈文研は発展を続けると信じています。

（埋蔵文化財センター 西村 康）

研究会の開催

日本遺跡学会設立

2003年2月1日、奈良文化財研究所平城宮跡資料館講堂において、日本遺跡学会設立総会が開催され

ました。

埋蔵文化財センターが2000年度～2002年度まで3か年かけて学会設立に向けた“研究集会”を積み重ね、なんとか学会の形に漕ぎつけました。設立総会には130名余の人が集まり、2003年2月22日現在230名ほどの方が会員になっていただいています。裏方を引き受ける事務局としては大変ですが、さまざまな分野からより多くの人に参加していただき、有意義で、かつ楽しい学会を創りあげていきたいと考えています。

「日本遺跡学会」とはなんぞや、何をする学会であるのか、については“設立趣意書”と“当面の活動テーマ”をご覧いただきたいのですが、要するに現代のわれわれが遺跡とよりよく共存、共生してゆくにはどうしたらいいのかを考える学会だと思えます。事務局は当面の間、文化遺産研究部遺跡研究室に置きますので、入会希望などは同研究室までご連絡ください。（文化遺産研究部 高瀬要一）

古代官衙・集落研究会

2003年3月13・14日の両日、古代官衙・集落研究集会を開催しました。この研究集会は、在地社会における律令国家支配の実態について、学際的に考え、調査研究成果や問題点を共有する場として1996年から継続してきているものです。今年度からは、この会を古代官衙・集落研究会と呼ぶことにしました。

今回は、昨年度の墨書土器をめぐる研究集会を受けて、「古代の陶硯をめぐる諸問題—地方における文書行政をめぐる—」をテーマとしました。その趣旨は、古代の陶硯や転用硯、墨を取り上げ、陶硯の変遷、器種構成、分布状況、陶硯出土遺跡と遺跡の性格との関係、陶硯の形態と使用主体の階層性、墨の生産技術・流通などをめぐる問題を整理検討し、官衙における文書作成や木簡記載のあり方についての研究成果と総合しながら、地方における文書行政や文字を介した末端支配の実態などについて考えることです。

研究報告は、吉田恵二「陶硯研究の現状と課題」、西口壽生「畿内における陶硯の出現と普及」、神野恵・川越俊一「平城京出土の陶硯」、生田和宏「城柵官衙遺跡における陶硯の様相—多賀城跡出土例を中心として—」、小田和利「地方官衙と陶硯—大宰府跡

出土例を中心として」、宮瀧交二「東国集落と墨書行為」、大川原竜一・山路直充「古代の墨」、岩宮隆司「末端文書行政の実態（１）－籍帳の作成過程をめぐって－」、樋口知志「末端文書行政の実態（２）－地方における荷札木簡の記載をめぐって－」の９本で、参加者は、地方公共団体の職員、大学・博物館関係者等で１００人余りでした。

討議では、陶硯の器種・法量の違いが使用者の階層や遺跡の性格を反映するものか否か、転用硯の機能と定形硯との使い分けの有無、朱墨の形状や朱墨用途、墨の在地生産・流通と地方における墨利用者との関係、郷段階での文書作成の実態、地理的環境と木簡記載のあり方などが主な論点となりました。

討議の中では５０倍ルーペによる転用硯の識別など有益な観察方法が示されたり、関東では定形硯は官衙か郡司居宅などに限定され、地方官衙識別の指標となりうることなど興味ある指摘もありました。

また、今回は、平城宮跡発掘調査部考古第二調査室の協力によって平城宮・京出土の陶硯の遺物も展示し、その遺物観察による休憩時の議論も活発で、情報交換に大いに寄与することができました。

（埋蔵文化財センター 山中敏史）

飛鳥・藤原京展

奈良文化財研究所創立５０周年を記念して開催した「飛鳥・藤原京展」は２００３年３月９日をもって全ての会期を終了しました。２００２年６月１日に大阪歴史博物館から始まり、東京都美術館、東北歴史博物館、そして四日市市立博物館と、約１０ヶ月の長期にわたる巡回展でした。どの会場も活気が満ちあふれ、来館者は合計１６万人を超え、盛況のうちに無事終えることができました。設置したアンケートでは、「よくまとめられており、興味深かった」「壮大な歴史の姿に感動した」という声も聞かれ、一人でも多くの方に古代のロマンにふれていただきたいと願っていた我々も喜ばしいかぎりです。この展覧会を開催するにあたって、慣れぬ展示作業に戸惑う点も多くありましたが、研究成果の公開普及活動の大切さを実感しました。この展覧会を機会に、奈文研の研究活動の理解者が増え、そして何よりも飛鳥・藤原宮跡を訪れる人が増えることを願っています。

（飛鳥藤原宮跡発掘調査部 奥村直紀）

お知らせ

飛鳥資料館 春期特別展

ASUKA 1/500

—「飛鳥・藤原京展」帰還展—

開催期間：平成１５年４月２２日（火）～６月１日（日）
《会期中無休》

開館時間：９時～１６時３０分 《入館は１６時まで》

入場料：

	大人	高・大学生
個人	２６０円	１３０円
団体	１７０円	６０円
中学生以下は無料		

アクセス：近鉄橿原神宮前駅からバス岡寺前行
「飛鳥大仏前」下車徒歩１０分
近鉄・ＪＲ桜井駅からバス岡寺前行
「飛鳥資料館」下車

所在地：奈良県高市郡明日香村奥山６０１
奈良文化財研究所飛鳥資料館
電話 ０７４４－５４－３５６１



飛鳥中心部復元模型

編集 「奈文研ニュース」編集委員会
発行 奈良文化財研究所
Ｅメール jimu@nabunken.go.jp
<http://www.nabunken.jp>

 R100
古紙配合率１００％再生紙を使用しています

 PRINTED WITH
SOY INK